

俳句

吾^{われ}
亦^も
紅^{こう}

湯 本 明 子

卒業期土筆も袴^{むすだか}胸高に

留守の鍵潜めし場所にこぼれ菘

春宵の樂のごと聴く京言葉

新涼や褪せて身に添ふ麻のシャツ

黙想の僧のうしろを浮かれ猫

歩を止むる人なき野辺の吾亦紅

帰らざる日々捨てがたき夏帽子

夫の忌の柚湯の柚子がひとつ寄る

道あらば雲の峰まで登りたし

木枯しに帽子追いかけて老紳士

野茨^のにあまたの蜂のもの狂い

アールグレイ飲みて寒暮の別れかな